

# くらげのお使い

楠山正雄

青空文庫



むかし、むかし、海の底うみそこに竜王りゅうおうとお后きさきがりっぱな御殿ごてんをこ  
 しらえて住すんでいました。海うみの中のおさかなというおさかなは、  
 みんな竜王りゅうおうの威勢いせいにおそれてその家来けらいになりました。  
 ある時とき竜王りゅうおうのお后きさきが、ふとしたことからたいそう重い病びょう  
 気きになりました。いろいろに手てをつくして、薬くすりという薬くすりをのん  
 でみましたが、ちつとも利ききめがありません。そのうちだんだん  
 に体からだが弱よわつて、今日きょう明日あすも知しれないようなむずかしい容体ようたいにな  
 りました。

竜王はもう心配で心配で、たまりませんでした。そこでみんなを集めて「いったいどうしたらいいだろう。」と相談をかけました。みんなも「さあ。」と言つて顔を見合わせていました。

するとその時はるか下の方からこの入道が八本足で、よるによろ出てきて、おそるおそる、

「わたくしは始終陸へ出て、人間やいろいろの陸の獣たちの話も聞いておりますが、何でも猿の生き肝が、こういう時にはいちばん利きめがあるそうでございます。」

と言いました。

「それはどこにある。」

「ここから南みなみの方ほうに猿さるが島しまという所ところがございます。そこには猿さるがたくさん住すんでおりますから、どなたかお使いつかいをおやりになつて、猿さるを一さるぴきおつかまえさせになれば、よろしゅうございます。」

「なるほど。」

そこでだれをこのお使いつかいにやろうかという相談そうだんになりました。するとたいの言ういことに、

「それはくらげがよろしゅうございましょう。あれは形かたちはみつともないやつでございますが、四よつ足あしがあつて、自由じゆうに陸おかの上あが歩あるけるのでございます。」

そこでくらげが呼よび出だされて、お使いつかいに行くことになりました。けれどいったいあまり気きの利きいたおさかなでないので、竜りゆう王おう

から言いつけられても、どうしていいか困りきつてしまいました。

くらはげはみんなをつかまえて、片っぱしから聞きはじめました。

「いったい猿というのはどんな形をしたものでしょう。」

「それはまっ赤な顔をして、まっ赤なお尻をして、よく木の上に上がっていて、たいへん栗や柿のすきなものだよ。」

「どうしたらその猿がつかまるでしょう。」

「それはうまくだますのさ。」

「どうしてだましたらいいでしょう。」

「それは何でも猿の気に入りそうなことを言つて、竜王さま

の御殿のりっぱで、うまいもののたくさんある話をして、猿が来

たがるような話をするのさ。」

「でもどうして海の中へ猿を連れて来ましょう。」

「それはお前がおぶつてやるのさ。」

「ずいぶん重いでしょうね。」

「でもしかたがない。それはがまんするさ。そこが御奉公だ。」

「へい、へい、なるほど。」

そこでくらはげは、ふわりふわり海の中に浮かんで、猿が島の方へ泳いで行きました。

二

やがて向こうに一つの島が見えました。くらはげは「あれがきつ

と猿が島だな。」と思ひながら、やがて島に泳ぎつきました。陸へ上がつてきよろきよろ見まわしていますと、その松の木の枝にまつ赤な顔をして、まつ赤なお尻をしたものがまたがっていました。くらげは、「ははあ、あれが猿だな。」と思つて、何くわない顔で、そろそろとそばへよつて、

「猿さん、猿さん、今日は、いいお天気ですね。」

「ああ、いいお天気だ。だがお前さんはあまりみかけない人だが、どこから来たのだね。」

「わたしはくらげといつて 竜 王の御家来さ。今日はあんまりお天気がいいので、うかうかこの辺まで遊びに来たのですが、なるほどこの猿が島はいい所ですね。」



「うん、それはいい所ところだとも。このとおりにけしきはいいし、栗くりや柿かきの実みはたくさんあるし、こんないい所ところは外ほかにはあるまい。」  
 こう言いつて猿さるが低ひくい鼻はなを一生懸命いっしょうけんめい高くして、とくいらしい顔かおをしますと、くらげはわざと、さもおかしくつてたまらないというように笑わらい出だしました。

「はッは、そりや猿さるが島しまはいい所ところにはちがいないが、でも竜りゅうぐう宮みやとはくらべものにならないね。猿さるさんはまだ竜りゅうぐう宮みやを知らしないものだから、そんなこと言いつていばつておいでだけれど、そんなことをいう人に一度竜どりゅうぐう宮みやを見みせて上あげたいものだ。どこもかしこも金銀きんぎんやさんごでできていて、お庭にわには一年中栗いちねんじゅうくりや柿かきやいろいろの果物くだものが、取とりきれないほどなっていますよ。」

こう言われると猿はだんだん乗り出してきました。そしてとうとう木から下りてきて、

「ふん、ほんとうにそんないい所なら、わたしも行ってみたいな  
。」

と言いました。くらげは心の中で、「うまくいった。」と思  
いながら、

「おいでになるなら、わたしが連れて行って上げましょう。」

「だってわたしは泳げないからなあ。」

「大丈夫、わたしがおぶって行って上げますよ。だから、さあ、  
行きましょう、行きましょう。」

「そうかい。それじゃあ、頼むよ。」

と、とうとう猿はくらげの背中に乗りました。猿を背中に乗せると、くらげはまたふわりふわり海の上を泳いで、こんどは北へ北へと帰っていききました。しばらく行くと猿は、

「くらげさん、くらげさん。まだ竜宮までは遠いのかい。」

「ええ、まだなかなかありますよ。」

「ずいぶんたいくつするなあ。」

「まあ、おとなしくして、しっかりとつかまっておいでなさい。あばれると海の中へ落ちますよ。」

「こわいなあ。しっかりと頼むよ。」

こんなことを言っておしやべりをしていくうちに、くらげはいつたあまり利口でもなくせにおしやべりなおさかなでしたか

ら、ついだまっていられなくなつて、

「ねえ、猿さん、猿さん、お前さんは生き肝というものを持つておいでですか。」

と聞きました。

猿はだしぬけにへんなことを聞くと思いながら、

「そりやあ持つていないこともないが、それを聞いていつたいどうするつもりだ。」

「だってその生き肝がいちばんかんじんな用事なのだから。」

「何がかんじんだと。」

「なあにこちらの話ですよ。」

猿はだんだん心配になつて、しきりに聞きたがります。くら

げはよけいおもしろがつて、しまいにはお調子に乗つて猿をか  
らかいはじめました。猿はあせつて、

「おい、どういうわけだつてば。お言いよ。」

「さあ、どうしようかな。言おうかな、言うまいかな。」

「何だつてそんないじの悪いことを言つて、じらすのだ。話して  
おくれよ。」

「じやあ、話しますがね、実はこの間から竜王のお后さまが  
御病気で、死にかけておいでになるのです。それで猿の生き肝  
というものを上げなければ、とても助かる見込みがないというの  
で、わたしがお前さんを誘い出しに来たのさ。だからかんじんの  
用事というのは生き肝なんですよ。」

そう聞くと猿はびっくりして、ふるえ上がってしまった。

けれど海の中ではどんなにさわいでもしかたがないと思ひましたから、わざとへいきな顔をして、

「何だ、そんなことなのか。わたしの生き肝で、竜王のお后さんの病気がなおるといふのなら、生き肝ぐらいいくらでも上げるよ。だがなぜそれをはじめから言わなかったらうなあ。ちつとも知らないものだから、生き肝はつい出がけに島へ置いてきたよ。」

「へえ、生き肝を置いてきたのですつて。」

「そうさ、さつきいた松の木の枝に引っかけて干してあるのさ。何しろ生き肝というやつは時々出して、洗濯しないと、よご

れるものだからね。」

猿がまじめくさつてこういうものですから、くらははすつかりがっかりしてしまつて、

「やれ、やれ、それはとんだことをしましたねえ。かんじんの生き肝がなくなつては、お前さんを竜宮へ連れて行つてもしかたがない。」

「ああ、わたしだつて竜宮へせつかく行くのに、おみやげがなくなつては、ぐあいが悪いよ。じゃあごくろうでも、もう一度島まで帰つてもらおうか。そうすれば生き肝を取ってくるから。」

そこでくらははぶつぶつ言いながら、猿を背負つて、もとの島まで帰つていきました。

猿さるが島しまに着つくと、猿さるはあわててくらげの背中せなかからとび下りおて、するすると木の上へ登のぼっていきしましたが、それきりいつまでたつても下りおてはきませんでした。

「猿さるさん、猿さるさん、いつまで何なにをしているの。早く生はやき肝いを持もつて下りおておいでなさい。」

とくらげはじれつたそうに言いいました。すると猿さるは木の上でくつくつ笑わらい出だして、

「とんでもない。おとといおいで。今日こんにちはごくろうさま。」  
 と言いいました。くらげはぷつとふくれつつらをして、

「何なんだつて。じゃあ生いき肝ぎもを取とつてくる約やくそく束そくはどうしたのです

」。



「ばかなくらげやい。だれが自分で生き肝ぎもを持つていくやつがあるものか。生き肝ぎもを取られれば命いのちがなくなるよ。ごめん、ごめん。」

こういつて猿さるは木の上から赤あかンべいをして、

「それほどほしけりや上あがっておいで。くやくも上あがれまい、

わあい。わあい。」

と言いいながら、赤あかいお尻しりを三度どたたきました。

いくらばかにされても、くらげはどうすることもできないので、  
べそをかきながら、すごすごりゆうぐう 竜りゆうぐう 宮みやへ帰かえつていきました。

竜りゆうぐう 宮みやへ帰かえると、竜りゆうぐう 王おうはじめみんな待まちかねていて、

「猿さるはどうした。どうした。生き肝ぎもはどうした。どうした。」

と、大ぜいくらげを取りかこんでせき立てました。

外ほかにしかたがないので、くらげはせつかく猿さるをだまして連れ出だしながら、あべこべにだまされて、逃にげられてしまった話はなしをしました。すると竜りゅうおう王はまつ赤かになつておこりました。

「ばかなやつだ。とんまめ。あほうめ。みんな、こらしめのため  
にこいつの骨ほねのなくなるまで、ぶつて、ぶつて、ぶち据すえろ。」

そこでたいや、ひらめや、かれいや、ほうぼうや、いろいろな  
おさかなが寄よつてたかつて、逃にげまわるくらげをつかまえて、ま  
ん中にひき据すえて、

「このおしやべりめ。この出過ですぎものめ。このまぬけめ。」  
と口くちぐち々に言いいながら、めちやめちやにぶち据すえたものですか

ら、とうとうからだ中の骨が、くなくなになって、今のような目も鼻もない、のっぺらぼうな骨なしのくらげになってしまいました。



# 青空文庫情報

底本：「日本の神話と十大昔話」 講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年5月10日第1刷発行

1992（平成4）年4月20日第14刷発行

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年8月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

# くらげのお使い

楠山正雄

2020年 7月12日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>